

# 中米ホンジュラスにおける 国連ボランティアの活動\*

武 谷 嘉 之

## 目 次

- I. はじめに
- II. ホンジュラス概要
- III. 国連ボランティアの概要
- IV. 視察報告
- V. むすびにかえて
- 付録：UNITEC における講演記録「近代化——日本の経験——」

## I. は じ め に

筆者は2004年8月30日から9月12日（日本時間）まで中米のホンジュラス共和国（Republic of Honduras）を視察する機会を持った。筆者の専門は近世日本経済史である。だから最初に筆者がどのような関心を持ってホンジュラスを訪れたのかという点をのべておかなければならないだろう。筆者には近世日本のイメージを形成していく上で、産業革命を一度も体験していない国の、特に農村を見て回りたいという思いが以前からあった。もちろんそのような国は現代でもいくつもあるわけだが、これまでそのような機会がなかった。そのようなときにホンジュラスで国連ボランティアとして活躍している武谷圭祐氏から情報教育推進のプロジェクトを視察してみないかというお誘いをいただいたのである。基本的に農村を対象としたプロジェクトであるとのことで、とにかく一度渡航することにしたのである。このような経過であるので、準備不足もあり、十分に綿密な調査ができたわけではない、また専門的分析も不十分である。しかしながら、ホンジュラス共和国における開発援助の実態についてほとんど知られていない

---

\* 本視察にあたって国連ボランティアの武谷圭祐氏に全面的にお世話になった。また在ホンジュラス日本大使館の了泉庵達士氏にはホンジュラス国内の情勢について教授を請け、中央アメリカ工科大学（UNITEC）における講演については準備段階から大変便宜を図って頂いた。記して謝意を表したい。

また本稿を執筆するにあたって奈良産業大学経済学部主催で報告会が開かれ、その席上で出席者から有意義なコメントをいただいた。出席くださった同僚、学生諸氏に感謝したい。もちろん本稿における誤りは全て筆者の責任である。

と思われる現状の中で、幾ばくかの価値があると考えここに報告するものである。

日本とホンジュラスの関係は主に開発援助を通じてのものである。ホンジュラスに対する我が国からの ODA は案件にして55件にのぼる。有償資金協力434億円、無償資金協力613億円、技術協力271億円とホンジュラスにとっては最も重要な援助国のひとつであり、特に1994年から1997年まで日本は無償資金協力の分野において最大の援助国であった。2000年から始まった日本の文化遺産無償協力の最初の案件として選ばれたのは、ホンジュラスにおける最大のマヤ文明の遺跡であり、重要な観光資源であるコパン (Copan) 遺跡であった。実際にその入口付近には日本の援助を示す大きな看板があった。<sup>(1)</sup> また1998年にホンジュラスを襲い国土の半分以上を巻き込んだハリケーン・ミッチによる被害に対する支援として、日本は金銭的な援助はもちろん、自衛隊を緊急援助隊として派遣している。一方観光などの目的でホンジュラスを訪れる日本人はまだまだ少ない。ホンジュラスに滞在する日本人も300人弱であり、そのほとんどが大使館関係者か、JICA 関係者、民間企業関係者などである。逆にホンジュラスからは国費留学生として年間3名から5名を受け容れている。JICA研修プログラムで留学し、帰国した留学生が「帰国留学生の会 (AHBEJA)」を組織し、交流の一助となっている。

本稿の構成は以下のようなものである。上述したような関係を持つとはいえ一般にホンジュラスについての知識は共有されていないと思われるので、まずホンジュラスの概要について簡単に紹介する。次に今回の視察の対象である国連ボランティアについて述べる。その上で本論に入り、全体の行程を述べた後、視察を行った順に報告していく。最後にこれらの視察を全体としてまとめる。なお筆者が中央アメリカ工科大学 (UNITEC) でおこなった講演の記録を付記しておく。

## II. ホンジュラス概要

ホンジュラスは北米大陸の南部に位置し、北部はカリブ海に南部は大西洋に面している。面積は11万2088平方キロで日本の3分の1弱である。人口は約704.1万人 (2002年推定) であるが、そのうち100万人以上が首都テグシガルパ (Tegucigalpa) に集中している。<sup>(2)</sup> テグシガルパは標高約960メートルの高原地帯にあるために気候は温暖で、現地の友人の言葉を借りれば「常春」である。

ホンジュラスは他の多くの中南米諸国と同様にスペインの植民地であったが、<sup>(3)</sup> 1821年9月15日に独立した。現在のように独立した共和国となったのは1838年のことである。完全に民政に

(1) コパン遺跡の発掘・調査については物的な支援だけでなく、人的な貢献もある。例えば中村誠一の活躍はよく知られている。具体的には [http://www32.ocn.ne.jp/~maya\\_copan/index.html](http://www32.ocn.ne.jp/~maya_copan/index.html) に詳しい。

(2) 「ホンジュラス共和国概観」在ホンジュラス日本国大使館発行。ここでの原資料はホンジュラス中央銀行資料である。

(3) 1539年スペインのグアテマラ総督領に編入。

移管されたのは1982年1月のことである。自由党と国民党が2大政党である。

通貨単位はレンピーラ (lempira) である。レンピーラはスペイン植民地支配に抵抗した英雄の名前である。テグシガルパの町を歩いているとレンピーラの肖像画が掲げてある商店があったり、宝くじの絵柄がレンピーラであったりと、この16世紀の英雄が今も親しまれ、敬われていることがわかる。

2002年の GDP は6,494百万米ドルであり、一人当たり GDP は922米ドルである。<sup>(4)</sup> ただし購買力平価で見れば2,600ドルという試算もある。<sup>(5)</sup> 実質失業率は30%以上といわれ、最貧国のひとつである。貧富の差も激しい。ただし後に詳述するが各地をまわってみた印象としては数字から想像されるような貧しさを感じることは少なかった。あくまで印象論に過ぎないが、幕末開港期に日本を訪れた外国人たちが、異口同音に日本が衛生的で健康的であるという印象を述べているのに近い感想を持った。主な産業は第一次産業であり、バナナ・コーヒー・砂糖・養殖海老などである。ただし GDP 比では既に農業部門は12.3%まで低下し、17.8%を占める工業部門の方が大きくなっている。<sup>(6)</sup> マキーラ (輸出加工保税区) における繊維産業が成長している。また木材も重要な輸出品であるが、森林破壊が問題となっている。<sup>(7)</sup> 天然資源、特に地下鉱物資源は豊富であるとされているが、開発は進んでいない。工業は近年急速に発展しているとはいえ、主に外資によって工業化が進みつつある。特に最近は韓国企業の進出が多いようである。ホンジュラス第2の都市であり、工業の中心地であるサン・ベドロ・スーラ近辺ではアメリカ合衆国の企業と並んで、韓国企業の工場もいくつか見られた。

### III. 国連ボランティアの概要

「国連ボランティア計画 (UNV) は、地球規模でボランティアリズムの推進そしてボランティアを動員することを通じて人間開発をサポートする国連機関<sup>(8)</sup>」である。「国連開発計画 (UNDP) の下部組織として設立され、ボランティアリズムが市民の間の信頼と互酬性を育むことにより、経済的にも社会的にも非常に重要な貢献を成しうるという認識の高まりのもと、世界各地で活動を展開<sup>(9)</sup>」している。

国連ボランティアはミレニアム開発目標 (MDGs) という大方針の下に各プロジェクトが動いている。2000年9月の国連ミレニアムサミットで採択された国連ミレニアム宣言と1990年代

(4) 同上。

(5) CIA “The world fact book 2004” presented on web.

(6) 2002年度実績。前掲「ホンジュラス共和国概観」。

(7) マキーラ及び森林破壊については多くの問題が指摘されている。本稿の主題ではないが、例えば国際労働財団のホームページに掲載されているホンジュラスの労働組合幹部の講演等を参照せよ。

(8) <http://www.unv.or.jp/index.html> 国連ボランティア (UNV) ホームページより。

(9) 同上。

に開催された主要な国際会議やサミットで採択された国際開発目標を統合し、一つの共通の枠組みとしてまとめられたものがミレニアム開発目標である。2015年までに具体的な数値目標の下に様々な活動が行われる<sup>(10)</sup>。

今回視察したプロジェクトの正式名称は地域テレセンタープロジェクトである。ホンジュラスの科学技術省が米州開発銀行（IADB）より資金援助を受けて、ホンジュラス国内に100のサテライト設備を持ったテレセンターをもつという計画である。そこでの能力開発と持続可能な地域開発の支援活動を行うことが、国連ボランティアの役割である。

本稿では詳しく触れないが、国連ボランティアが独自にプロジェクトを行う場合もある。例えば2004年7月15日から30日にかけて Arte Para Todos（芸術を全ての人に）というプロジェクトが行われた。これは世界各国の芸術家がテグシガルパで創作活動をするという企画であった。例えばテグシガルパ市内の建築物のいくつかに、このプロジェクトで製作された壁画が残<sup>(11)</sup>されていて、街を彩っている。このプロジェクトは国連開発計画（UNDP）の優秀プロジェクトにも選ばれている。

#### IV. 視 察 報 告

##### 1. 行程と目的

本視察は現地時間の2004年8月31日から9月8日までテグシガルパを起点として主にホンジュラス西部を中心にまわった。マルカラ（Marcala）、サンタ・バーバラ（Santa Barbara）、ドローレス（Dolores）の順に訪問した。移動は全て武谷圭祐氏の自家用車である。ホンジュラスには北部の一部の地域を除いて鉄道はない。空路はテグシガルパとサン・ペドロ・スラ（San Pedro Sula）に国際空港があるほか、国内に11の空港があるが、一般に移動は車による陸路を利用することが普通である。バスは縦横に走っているが、旅行者・滞在者が利用するのは困難である。例えばバス停がどこかはほとんどわからない。何の標識もない交差点がバス停であったりするからである。またバス会社も存在するとはいえ、個人経営のバスも多く、さらに利用を困難にしている。

町のレイアウトは、植民地時代のそれを色濃く引き継いでいる。規模こそ違え、セントロと呼ばれる、カトリック教会と公園のある地域を中心にして町が形成されている。それはテグシガルパのような大都市から後の述べるドローレスのような村まで基本的には同じである。多くはセントロが最も繁華な地域である。

本視察の目的は上記のプロジェクトが実際にどのような形で運営され、町や村といった地域

---

(10) 国連開発計画（UNDP）「ミレニアム開発目標」パンフレット参照。

(11) 他にも街のあちこちに彫刻が残されている。テグシガルパ空港のカフェのしゃれた内装もこの時の作品であるとのことだった。その他、Arte Para Todos については <http://www.undp.un.hn/unv/arteparatodosweb> に作品の写真等が掲載されている。

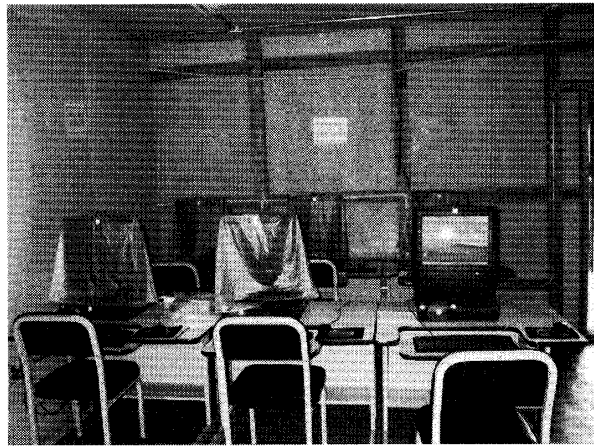


図1

社会にどのような影響を及ぼすかを実地に見聞することにある。

## 2. マルカラ

最初に訪れたのは、マルカラである。テグシガルパから時速120キロで休みなく南下して約6時間の距離<sup>(12)</sup>にある。セントロの教会の向かいが集会所であり、国連ボランティアの会議はそこで行われた。6人ほどのメンバーでミーティングがもたれた。武谷氏以外は全員がマルカラに住むホンジュラス人<sup>(13)</sup>である。

この町の施設は稼働前であるが、機材は一通りそろっている段階である。施設は町から車で10分程度離れた畑のそばにある。大変辺鄙な印象であったが、施設をこの場所に決定したのは地元の要望をふまえてということであった。近くに小学校があるためだろう。施設そのものはコンクリート・ブロックで作った2部屋の小さな建物である。屋外にネットに接続するための大きなパラボアアンテナが設置されている。ひとつの部屋には米デル社製の7台のパソコン<sup>(14)</sup>が設置され、いよいよこれから本格的に稼働するというところのようだ。(図1) またもう一つ

- 
- (12) やや余談であるが、ホンジュラスのイメージをより具体的に形成するために以下を付記しておく。「夜になる前につきたい」ということで大いに急いだのだが、その理由は暗くなって実感することになる。発展途上国においては至極当然のことであるが、街灯がないため見通しがきわめて悪い。さらにセンターラインがないため対向車と正面衝突する可能性がある。しかも往々にして対向車はライトをつけていない。道路事情も悪く、標識がないのは当然としても、舗装された道路のところどころに穴があいていて、時々車が大きくはねる。またホンジュラスには詳細な道路地図はない。目的地に着くためにどのルートをとればいいのかということだけでなく、その道路のどの位置に穴が開いているかをも経験として覚えていかなければ移動できないとのことであった。
- (13) ホンジュラスの人種構成は90%がインディオと白人の混血である、いわゆる mestizo である。この会議に出席していたボランティアも皆メスティーソであった。ただし正式の国連ボランティアは一人であった。
- (14) 図1には6台しか写っていないが、1台は管理者用として少し離れた場所に設置されている。

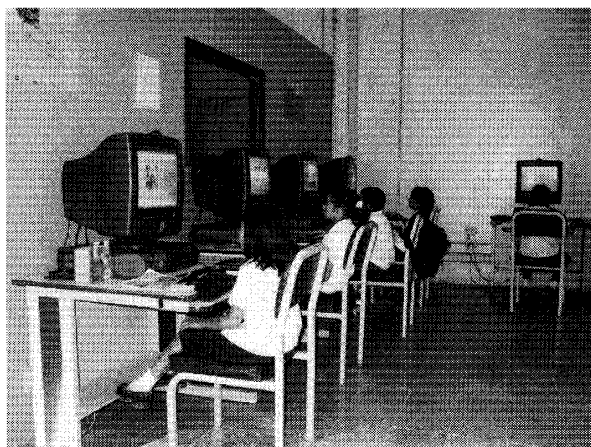


図 2

の部屋には42インチの Panasonic ブランドのブラウン管テレビと Victor の VTR が設置され、視聴覚教室としても期待されているようだ。いよいよこれからということでボランティアそれぞれの顔も大変生き生きしている。

マルカラでの課題は具体的にどのような形で施設を運営していくかという事であるようだ。マルカラは大きな町ではないが、それでもインターネットカフェが数軒ある。これらは低速のダイヤルアップ回線を利用しているが、一般に利用されている。そのため町から離れたこの施設の利用者としては先述のように隣接する小学校の生徒が中心となる。つまり純粋な教育施設に近い形で運営されることになる。ここで予想される問題は施設の維持管理についてである。パソコンをはじめとする情報機器の管理に関してはボランティアではなく、専門の管理者を雇うということである。さらに衛星を使った超高速通信であるため、利用料・通信料の負担は大きい。これらの経費を誰が負担するのかがまだ詰め切れていないということであった。

### 3. サンタ・バーバラ

第2の目的地はサンタ・バーバラである。ホンジュラスの西部にある中規模の都市である。セントロの公園を囲んで商店が建ち並んでいる。この中心街のすぐそばに施設があった。この施設は既にインターネットに接続されており、付近の小学生が授業で利用していた。やはり大きなパラボラアンテナとデル社製のパソコンがクライアント用に10台、管理者用に1台設置されている。(図2) ちょうど利用していた生徒は低学年であったが、パズルのような教育ソフトを使って学習していた。これらのソフトはインターネット上のフリーソフトであるということであった。ソフトウェアに関しては以後も主にフリーソフトを利用していく計画であるということであった。またこの施設はサンタ・バーバラの観光案内所と併設されていた。この観光案内所もボランティアによって運営されている。さらに武谷氏が3ヶ月前に訪れた際には物置兼ゴミ捨て場であった場所が、これもボランティアの手作りによって観光客向けのカフェになっていた。このようにサンタ・バーバラではテレセンターと、情報発信機能を持った地域のコ

コミュニティセンターとを連携させて機能させようとしているようである。なおここを運営しているのは機器の管理者、ボランティアを含めて全員がホンジュラス人であった。

この施設は上記のように既に稼働しているため、マルカラとは違った問題が発生していた。ひとつは所管の問題である。このプロジェクトは国連とホンジュラス科学技術省が主体となっておこなっている。ただし資金の出所は米州開発銀行であり、実際に作業をおこなっているのは武谷氏のような国連ボランティアが中心である。そのため意思の疎通が必ずしもうまくいかず、現場ではいくつかの混乱が起こっていた。

さらにこれと関連して、手当の問題も出ていた。これはサンタ・バーバラに限ったことではないが、国連ボランティアのうち現地ボランティアに関して手当が支給されていないという問題であった。<sup>(15)</sup> この視察に出発する前、テグシガルパですでにこの問題は始まっていた。武谷氏はそのため何度か科学技術省に交渉に赴いた。政府の主張は国連ボランティアの働きが悪いということであった。このプロジェクトは国連ボランティアが実際の業務を行っているのだが、現地ボランティアに関しては科学技術省から手当が支給されている。武谷氏の交渉では9月2日木曜日には振り込まれるということであったが、筆者たちがサンタ・バーバラを訪れた当日の9月3日になっても支給されていないということであった。結局この問題は筆者が帰国するまでの間には決着しなかった。

より本質的な問題として、民間との競合がある。マルカラと違ってサンタ・バーバラの施設は町の中心地にある。そのはず向かいにはインターネットカフェが営業していた。ほんの数台の中古パソコンをおいてあるだけの店舗であるが、このようなインターネットカフェはこの町にはいくつかある。パソコンの性能という点でも、通信速度という点でも、国連ボランティアが運営している施設とは比べものにならない。料金的にもほぼ同様の料金で利用可能なようである。残念ながらインターネットカフェの経営者に話を聞くことはできなかったが、おそらくこのプロジェクトによって大きく売り上げを落とされたと思われる。

#### 4. ドローレス

マルカラが町、サンタ・バーバラが都市とするとドローレスはまさに村である。ホンジュラスの南西部コパン県にある貧しい村である。ドローレスについたときは2時をまわっていたが、昼食を食べることができるような店はなかった。この村には2軒の雑貨屋以外に店はない。しかしセントロの教会はやはり立派なもので、公園を挟んだ向かい側に施設はあった。ここでは地域の集会所のような建物の半分が当てられていた。やはり小学校のすぐそばに設けられてい

---

(15) 誤解を防ぐためにもう一度確認しておくが、これらの施設を運営しているボランティアは期間限定されているが、その期間中は完全にこのプロジェクトに専念している場合が多い。つまり日本語のボランティアという言葉がもつ無償労働のイメージとはかなり違う。誤解をおそれずにいえば、アルバイトに近いイメージである。

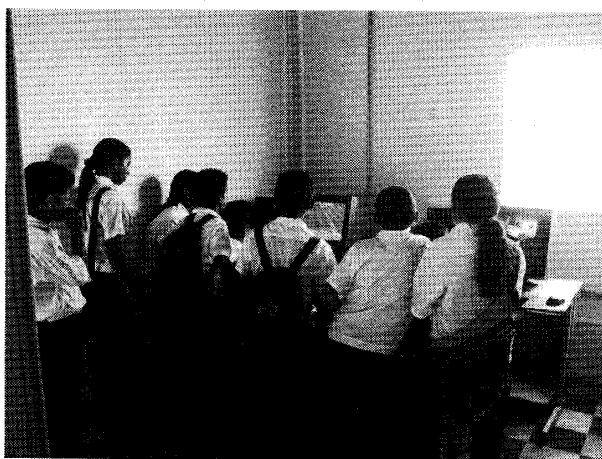


図 3

る。ここを担当する国連ボランティアは1名でドイツ人であった。機材としては IBM 社製のパソコンが4台と別室に管理者用が1台設置されている。(図3) これとシャープ社製のコピーとプリンタの複合機が1台ある。

ドローレスの状況もマルカラとほぼ同様にインターネットにつながる直前といったところである。ただマルカラの機材がまだ利用されいなかったのに対して、こちらではスタンド・アローンではあっても生徒の利用に供されているようで、筆者たちがついたときには7人ほどの生徒が1台のパソコンを囲んでサッカーゲームに興じていた。限定的とはいえ、稼働していることにより、マルカラとはまた別の問題が生じている。

4台のパソコンが並んでいると述べたが、そのうち1台は全く動かなくなっていた。また1台は起動する場合もあればしない場合もあると説明をうけた。最新の新品のパソコンが数ヶ月で2台も自然と故障するということはある得なくはないが、何か特別な原因があると考えの方が自然である。彼らの話を総合すれば原因はきわめて単純な事のように感じられた。<sup>(16)</sup> 設置場所が南向きであったため、CPUの温度が上がりすぎたために故障したと筆者には思われた。この施設にもボランティアではない専任の管理者が常駐しているのだが、このような状況であった。

さらにシャープ社製の複合機もプリントできないということであった。ファックスは送信できるということなので、印刷機部分の不調のようである。トナーがきれているだけのようにも思われたが、新しいトナーを用意する予算はないようである。本当に故障であるとすれば、無

(16) やや詳細に述べれば次のような状況であった。窓際に4台並べて設置していたが、そのうち最も日光の当たる中央の1台が動かなくなった。動かなくなった1台を一番奥に移動させ、奥のパソコンを中央に持ってきたが、それもまた調子が悪くなっているということである。このパソコンの筐体は黒色であった。南向きのカーテンのない窓、BIOS画面すら起動しない、電源は動いている等の状況から考えれば筐体内温度の上昇によるCPUまたはその他半導体の損傷である可能性が最も高いと思われる。電化製品は全てそうであるが、特にパソコンは直射日光を避けて設置するのは最も基本的な原則であろう。



料保証期間内であるので修理に出すことは可能であるが、その場合は先ほどのパソコンも同様なのだが、サンタ・ロサ (Santa Rosa de Copan) まで持ち込まなければならないとのことであった。<sup>(17)</sup>

ドローレスは先に述べたように大変小さな村で、インターネットカフェはない。だからこの施設の意義は大きいと思われる。しかしながら上述のように管理・メンテナンスという点が大きな課題となるだろう。

#### 5. プロジェクトに残された課題

これらの視察から感じ取られた課題をまとめる。筆者が見た範囲では大きく3つにまとめることができる。

第一に提供されている機材が実際に必要とされているものと必ずしも一致しないということである。この点はどの施設にも共通した問題である。特に小学生へのIT教育が主眼であるならば、高性能のパソコンと衛星を利用した高速広帯域通信設備の必要性は薄い。むしろダイヤルアップによる低速通信で、安価なパソコンであっても、多くの台数を提供の方がより価値があるように思われる。これは武谷圭祐氏が現地ボランティアとの会話の中で得た実感でもあるようだ。

長期的に見れば価値があるように思われるかもしれないが、このような陳腐化の激しい機材の場合、現在のニーズに合致したものを優先することが原則であるべきだろう。ましてや中長期的に維持できないと思われるような機材であれば全く無駄となるかもしれない。

第二に民間のインターネットカフェとの競合である。このプロジェクトが立ち上がったあとは、地元で維持・運営していくことが原則だという。そうであれば、ある程度の独立採算を目指すという動きが出てくることは当然である。サンタ・バーバラではその動きは顕著であった。筆者が見た範囲でも一般の利用客が数名この施設を利用していた。この施設ができたことによって民間のインターネットカフェが圧迫され、つぶれてしまうということになりかねない。民間の経営するインターネットカフェと共存し、情報化がより一般化していく方策を探るといふ課題が残されているだろう。

第三に資源である。まず人材である。ドローレスで見たように管理者の能力は必ずしも十分ではない。ただしこれは扱っている機材が彼らの年収をはるかに超える上に、万が一取り返しのつかない事態になった場合の責任の所在が明らかでないという、システム上の問題などもあり、一概に能力の問題のみに帰するわけにはいかないこともある。しかし多少のトラブルを復旧できる能力のある人材が育たなければこれらの施設が順調に運営されるということはないだろう。<sup>(18)</sup>

(17) さらに彼らの言によると、持ち込んだところで直るかどうかわからない、ということのようだ。

最貧国ホンジュラスの貧しい農村にすぐにパソコンが普及し始めるということはない。だからこれらの施設にとって必要かつ十分なサポート・メンテナンス体制がメーカーによって整備されることは期待しがたい。そうなると今回の援助によってつくられた設備が故障した場合、動かないまま放置されるという可能性は極めて高い。修理代金の負担は彼らには耐え難いからである。今後実際にこれらの施設の利用がすすめばすすむほど技術的なサポートを安価に提供する体制の構築が重要な課題となっていこう。これも社会的な資源の問題であろう。

最後に資金の不足である。必要以上に高性能なこれらの機器を維持していくコストは、彼らの頭を悩まし続けるだろう。

## V. むすびにかえて

最初にも述べたが、ホンジュラスの印象は統計的資料から推測できる、中米における最貧国というイメージとはかなり違ったものであった。たしかに貧富の差は激しく都市における貧困層居住地域の生活は豊かとはいえない。住居は劣悪で、生活インフラも十分ではない。またいわゆるストリートチルドレンが多いのも事実である。都市においては貨幣の所有の多寡が生活の質を決定するという筆者たちにとって自明の常識が通用するようだ。

しかしひとたび農村に入れば、もちろん依然として電気さえ通っていない村もあるが、比較的清潔で、健康的な生活が営まれているように感じた。筆者がまわった地域が気候が温暖であるということも大きく影響しているのかもしれない。農作業を見ている日本の農業のイメージとは、もちろん全く違う。きわめて粗放的だ。しかし生産されたものは、旅行者の感慨を割り引いてもたいへんおいしい。このような自然条件に左右される部分を除いたとしても、農村のゆたかさは感じられた。もっとも象徴的にあらわれているのは子供たちであった。最後に訪れた村、ドローレスでは機器の故障などのせいでゆっくりと村を見て回ることができた。開発途上国の子供たちの表情が無垢で輝いているなどというのは使い古された言説であるが、ドローレスの子供たちはそれだけではない。彼らは白いシャツに、紺のボトムという制服を着て学校に通っているが、皆さっぱりと小綺麗にしている。彼らの髪もきちんとととのえられ、親が子供に愛情をかけていることが伝わってくる。ドローレスは統計的には貧しい村であるが、困窮しているという風は彼らからは全く感じられないのである。農村における人々の生活の実質充足度は低くないと感じられた。むしろサンタ・バーバラのセントロの公園に集まる人々の方が困窮している感があった。もちろん農村においても貧富の差は激しい。特に印象的であったのはアメリカ合衆国に出稼ぎに行き帰ってきた家の豪華さである。

---

(18) 日本でもそうであるが、パソコンに不慣れな人の場合、往々にして、いたずらにさわると壊れてしまうのではないかという無用のおそれと、一流メーカーの高級な機械であるからそんなに簡単に故障するわけがないという根拠のない信頼が同居している。そのような周囲の目が彼らをさらに臆病にしている面があるように思われた。

これもよく言われることであるが、旧来の生活によって獲得していたゆたかさは市場中心の社会に組み込まれる過程で大きく減殺されるのであろう。筆者にとってはこれを実感できただけでも有意義な視察であった。

付録：UNITEC における講演記録（2004年9月7日10：00 於1302教室）<sup>(19)</sup>

### 近代化——日本の経験——

#### あいさつ

初めまして。みなさんの前で話せることを幸せに思います。そしてこのような機会を与えていただいたことに感謝します。8月31日にテグシガルパについて筆者が勤務している奈良の町と雰囲気がよく似ているので驚きました。奈良は710年から80年あまり日本の首都であった町です。同じように盆地にある古い町です。7世紀に建てられた世界最古の木造寺院もあります。機会があれば是非いらっしゃってください。歓迎します。（以上スペイン語による）

筆者の専門は前近代の労働だが、本日は概説的な話がよかろうということであるので日本の近代化全体に関わる話をする。

#### 日本の位置・形

日本はほぼ東経135度北緯35度あたりにある南北に長い国である。ホンジュラスのほぼ反対側にある。大きく四つの島からなる島国である。伝統的に中国の影響を強く受けてきたが、このような地形であるから比較的独立性の高い歴史をはぐくんできた。一番北の島を除く3島については9世紀頃にほぼ統一的な政権が成立し、16世紀末以降は完全に統一された。それ以降250年にわたり国内では大きな戦争はなかった。

#### 日本の現況

では現在の日本を紹介する。（パワーポイントによるスライドを見せながら）これは筆者が住んでいる大阪の写真である。デパート・ホテル・オフィスビルそして鉄道の駅である。一番向こう側には海が見える。駅の右側にはやはりデパート・オフィスビル等があり、川が流れている。川の向こう側にも町が広がっている。一番向こうに見えるのは山である。最も高いところで標高900メートル程度の山である。大阪は日本第二の大都市である。大阪を含むこの地域に1000万人以上の人が住んでいる。

筆者の住んでいる町を見てもらった。日本全体では約1億2600万人の人が住んでいる。ホン

---

(19) 本講演は特に記した部分以外は筆者が日本語で話し、日本大使館の了泉庵氏にスペイン語訳していただく形で行った。了泉庵氏には当日の通訳だけでなく、講演の内容についてもホンジュラスの学生に理解できるかどうかという点から多くのアドバイスをいただいた。記して謝意を表す。もちろん全ての記述の責任は筆者にある。なお聴講者は約200人であった。

ジュラスの約20倍の人口である。

日本の面積は377キロ平方で、ホンジュラスの約3.4倍である。

GDP は約 4 兆1700億米ドル、一人当たり GDP は2002年度の数字で31200米ドルである。ホンジュラスの2003年度の一人当たり GDP は926米ドルである。

この数字はそれほど意味のあるものではない。購買力平価の問題やサービス業の換算をどうするかという問題があるので概算であり、目安にすぎない。しかし、単純に比較して33倍、上記の条件を考慮した場合はそれ以下になることは確実である。同じように一人当たり GDP を19世紀における日本とイギリスで比較すれば約12倍という試算がある。つまり産業革命前の日本と、当時の最先進国との間の格差は、現代と比べると穏やかなものであったということになる。ただし、工業化開始前の状態を比較すればイギリスの3分の1程度<sup>(20)</sup>の一人当たり GDP であったという推計になる。

### 日本経済の3つの画期

日本経済が今述べたような姿になるまでに3つの画期を経験した。最初の画期が日本では明治維新と総称される前近代から近代への飛躍である。御承知のように日本は内発的に工業化が始まったのではない。他の多くの開発途上国と同様に直接的には外生的理由によって工業化へのきっかけが与えられた。それまでの農業中心の伝統的社会から工業化社会への変化が始まった時期を日本では明治維新とっている。これは政治的なクーデターを伴ったため、狭義にはこのクーデターの成功、つまり1868年の政権交代を狭義の明治維新という。しかし、今からお話する明治維新の経験とはそのような政治的な変革に限らないので、時期も伝統的社会の末期から軽工業が軌道に乗った時期までを明治維新时期とする。この時期の特徴を簡潔に述べるならば、生糸を輸出した外貨によって綿紡績業を起し、take off に成功したといえる。外貨不足は1970年代までの日本の慢性的な問題であったが、日本の近代的貿易の歴史が出超から始まったことは強調しすぎても強調しすぎることはない。

第2の画期は戦間戦中期である。これは第1次大戦の開始から第2次大戦の終了までの事である。第1次大戦はご存じのようにヨーロッパが主な戦場となった。日本も参戦したが、ほとんど戦場とはならなかった。そのため協商側の工業産品を代替して供給する役割を担った。それまで日本が得意としていた軽工業品、繊維製品だけでなく、重化学機械工業製品も供給することになった。この時期は日本の経済構造が急速に重化学工業化した時期である。ただし第1次大戦の終了とともに日本の重化学工業製品は競争力を失い、過大な設備投資の結果による外貨不足と需要不足による不況に見舞われることになった。日本はこれらの問題を一気に解決することを試みた。原料、エネルギーの供給地として、日本製品の販売先として、中国に進出し

---

(20) これは S. Kuznets の推計を西川俊作が修正したものである。

た。軍事力を行使したのである。これは第2次大戦につながっていった。日本は無理な重化学工業化を進めた。そのゆがみを解決するために市場原理に反した方法をとった。これは失敗であり、過ちであった。ただしこの時期に形成された労働慣習や商慣習が戦後日本の復興と次の画期である高度経済成長期において重要な役割を果たしたことは無視するべきではない。

第3の画期は高度経済成長期である。この時期は10年以上に渡って実質経済成長率が年10%を超えるという異常な時期であった。この時期に日本は軽工業国から本格的な重化学工業国へ脱皮し、いわゆる先進国の仲間入りを果たした。初期には綿を中心とした繊維産業が貴重な外貨を獲得した。その後造船業が、さらに自動車産業が中心的役割を果たした。もちろんこれらの機械工業が発展するにあたって必要な鉄が国内から供給されたことを忘れてはならない。この時期は伝統的な生活様式がほとんど姿を消した時期でもあった。

みなさんは第2次大戦に負けた日本が急激に先進国の仲間入りをしたこと、言い換えれば高度経済成長と、それを可能にしたものについて関心があるかもしれない。しかし、実は長期のトレンドで見れば敗戦後の経済成長は、もちろん異常な高さではあったが、19世紀初頭以来の流れで理解することができる。つまり第3の画期である高度経済成長をもたらした国内的な要因の多くは第2の画期である戦間戦中期にその始原を求めることができる。例えば戦後の日本を最初に支えた綿業は1933年の段階で日本が世界一の輸出国になっている。また高度経済成長の花形であった造船業も戦前の段階で既に世界一の造船国であった。統計だけを見れば戦後の急速な経済成長は戦争によって失われた時間を大急ぎで取り戻しただけであるようにも見える。

最も重要で決定的なのは、日本が前近代の未開発状態から、極めて急速に工業国となったことである。つまり明治維新时期こそが日本が現代の姿になった鍵である。今日はこの成功を可能にした条件について話してみたい。

### 近代化の条件

一般に産業革命をむかえるためには二つの要素が重要である。主体と条件である。主体というのは簡単にいえば近代的な資本家と近代的な労働者のことである。この二つがいかにして形成されたかということが問題となる。それ以外にも政治指導者や、工業化を推進する opinion reader としての知識人なども主体に含まれる。条件というのは工業化社会をむかえるための客観的な条件のことである。イギリスのように主体と条件が内生的に成長し、存在する特異な例もあるが、それ以外の工業化に成功した国は条件が先に形成され、外生的なインパクトによって主体が形成されてきた。理論的には主体が先に形成され、条件が整わないうちに工業化をスタートさせるというパターンを考えることもできる。ロシアなどはそのパターンと言ってもよいだろうが、実際に成功した事例ははなはだ少ないといわざるを得ない。

客観的条件とは具体的にはなんだろうか。資本主義という用語を使うかどうかは別として、市場が商品交換の中心となることが工業化社会においてきわめて重要な意味を持っていること

は間違いない。つまり市場において商品交換を可能ならしめるものは何かということが、まさに工業化を可能にする条件とは何かということである。理論的な話をすることはおそらく筆者に求められていることではないだろう。ここからは具体的に日本で前近代においてどのような形で客観的な条件が整えられていったのかということについて話を進めていきたい。

## 日本の経験

### 人口

まず人口である。日本の工業化以前の人口増加率は相当低かったと考えられる。しかしいわゆる伝統的な多産多死社会を想像するのは正しくない。まず出生の方だが、決して豊富な事例があるわけではないが、前近代の合計特殊出生率を計算してみると、5.81という結果が出た。前近代において正確に合計特殊出生率を計算できる国は多くないが、5.81という数字はそれらに比較して明らかに低い。乳児死亡率に関しても176‰という推計である。これも前近代社会としては相当低い。そのため、近代化による死亡率の劇的な低下の結果、人口爆発が起こるといふ危険性は相対的に低かったといえるだろう。事実、産業革命以降も20世紀初頭まで人口増加率は1%程度であった。

この人口増加率は政策的に計画された数字ではなかった。しかし、1%程度の人口増があったことは新しい労働力を創出し賃金の上昇を穏やかなものにした。同時に一人当たり所得を低下させるほどの人口増ではなかったのである。

### 農業

次に農業である。一国経済のみのモデルで考えた場合、工業化の原資は農業または商業から得られなければならない。工業化以前の社会における商品のほとんどが農業生産品であることを考えるならば商業の発展もまた農業に負っているといわなければならない。これらの事を考えれば農業余剰の存在は決定的に重要である。人口の増加率以上に農業生産量の増加がなければ経済発展は起こりえないのである。

前近代の日本が農業生産を拡大していった過程は2段階に分けられる。17世紀においては耕地面積の拡大が最大の理由である。しかし、島国である日本の国土はほとんどが山岳で、農地に適している場所はそれほど多くない。だから18世紀にはいるとフロンティアはほぼ消滅し、代わってこれまでの農地からより多くの果実を得る方法が考えられるようになった。

日本のとった方法は労働集約的農法であった。これは実はヨーロッパの資本集約的農法とは逆の方向を向いた改革であった。これをして速見融は「勤勉革命 (Industrious Revolution)」と名付けた。具体的には今までと同じ面積の農地により多くの労働を投下する農法である。緻密な水の管理、計算された施肥、人手を惜しまぬ雑草・害虫駆除といったところから始まり、それぞれの地域に適した品種の選別や、より高い商品価値を持つ農作物の栽培へとすすんでいった。

この「勤勉革命」を引き起こした要素として「小農」「農書」「定免制」の3つが重要である。簡単に紹介すれば直系単婚家族による農業経営を「小農」と呼ぶ。言い換えれば農業労働者を雇用することなく経営する小規模な農業経営のあり方である。耕作者と土地所有者と貢租納入者を一致させることが、当時の政権の原則的な農業政策であった。「農書」は農業に関する技術などを記した書物の総称であり、多種多様な農書が一般に読まれていたと考えられている。これらの「農書」は実際の農民によって著されている点も大きな特徴といえる。「定免制」は政権に納める貢租の額が固定されている貢納制度の事である。つまり家族単位で経営されている農家にとって、貢租の額が決まっていることは、収穫の増加はそのまま世帯収入の増加を意味したということになる。そしてその方法は「農書」によって教えられるところが多かったのである。

### 市場の形成

今述べたように17, 18世紀において農業生産量は相当程度増加したのであるが、市場を形成するためにはそれだけでは不十分である。形成された農業余剰が市場を通じて取り引きされるためには別の要因が必要である。それは「石高制」によってもたらされた。「石高制」とは貢租を原則として米で納めなければならないという制度である。これは市場の形成と逆行する制度のように思われるだろう。事実施政者の意図はそのようなものであった。ところが人間は米だけでは生活できない。施政者たちは米と他の商品を交換する必要に迫られた。ものを交換する仕組みとして最も合理的なのは貨幣を媒介とすることである。幸いなことに日本は貴金属資源に恵まれていた。そのため貨幣を鑄造して市場を通じて米と他の商品を交換するということが急速に進んだ。

ところで米の収穫される時期は決まっている。大体8月から10月までの間である。しかし資金需要は常にある。自ずから手形取引が生まれてくる。また一定の期間に大量の米を取り引きするためにはある種の技術と制度が必要である。ここに中央市場の生まれる素地がある。全国的な米相場がたち、先物をはじめとする金融取引が行われるようになった。これは世界的にもきわめて早い事例である。

市場の形成との関係で最後に「三貨制」に触れておきたい。「三貨制」とは日本国内で3種類の本位貨幣を流通させる制度である。具体的には金流通圏と銀流通圏、さらに共通して銅が流通するという制度のことである。それぞれ貨幣単位が異なるため、金流通圏と銀流通圏の経済力の変動などの要因によって交換レートが毎日のように変化した。いわば外国為替取引を国内で行っていたようなものである。これは非常に非効率な制度であったが、近代以降この為替取引の経験は大いに役立ったのである。

### 主体の形成

農業余剰の形成とそれを市場で取り引きする制度が形成されたことによって工業化への条件はかなりの程度整えられた。最後に工業化の主体となる労働者がどのように準備されていった

かを紹介したい。

前近代における労働者のほとんどは農民である。先程述べたように日本の場合、ほとんどが小農であり、独立した経営者であった。彼らの中には明確に利潤動機が生まれている。そして彼らが参照した「農書」の多くは資源の有効配分を説いている。つまり土地を有効に利用し、時間を無駄にしないことを強調している。ここに近代的労働倫理の萌芽を見ることはそれほど難しくない。

さらに雇用労働であるという意味では近代的労働により近い立場の建築職人のケースとして、使用者側が線香を使って時間の長さを測り、労働時間を決定していた事例がある。一般に考えられている前近代の労働のイメージとは全く違うイメージである。このような時間管理のあり方と工場の時間管理のあり方は非常に近い。17, 18世紀の間に近代的労働に対応できるような労働者が形成されていったと言ってよからう。

もう一つ忘れてならないことは識字率の問題であろう。農書が多くの農民に影響を与えるためには、多くの農民が文字を読めなければならない。またいかに小規模であろうと独立して経営を営んでいく上で幾ばくかの計算能力は身につけなければならない。これらの能力は民間の教育機関によって養われた。「寺子屋」である。教育の重要性については筆者が話すまでもない。

#### 小括

最後に工業化に必要な要素についてもう一度纏めておきたい。ひとつは客観的な基礎的条件が整っていることである。農業余剰が存在すること、そして近代化とともに人口爆発が起こって一人当たり GDP が低下するというような状況にないこと。次に工業化以前に市場が形成され機能していること。そうでない場合は市場のシグナルなしに工業生産を始めなければならない。市場からのシグナルがない状態での工業生産は、ほとんどの場合非効率的である。これら二つが客観的条件である。主体の問題としては近代的労働に対応できる労働者の形成がある。彼らが存在しなければ工業生産は多くの困難にぶつかるだろう。労働者を雇用する起業家・資本家をどのように養成するかという点についても近年議論が交わされている。日本の場合は渋沢栄一、豊田佐吉などが典型的な役割を果たした。

#### おわりに

前近代の間に今話したことを達成していたことが、近代以降の日本の経済的成功の礎となった。急速な経済発展の前に250年以上にわたる助走期間があった。しかし最初から成功が約束されていたわけではない。多くの危機や困難があった。いくつかの偶然に助けられた。その過程でいくつかの失敗をし、過ちを犯した。

筆者はホンジュラスが大変気に入った。この1週間で多くの素晴らしい人に出会うことができた。日本の経験をふまえて筆者からひとつのメッセージを送りたい。是非ホンジュラスの文



化や価値観を大切にしてほしい。急速な社会の変化は大きなコストを伴う。日本はあまりに急ぎすぎた近代化の過程で多くのものを失った。漸進的で着実なあゆみが幸福な社会を実現する最もよい方法であると思う。ホンジュラスの成功を心から祈っている。

#### 質疑応答（抜粋）

Q ホンジュラスへの援助は正当に利用されていると思うか。

A これについては筆者は全くわからない。<sup>(21)</sup>ただし、ホンジュラスへの支援に限らず、経済援助には市場原理が及ばず、時として不効率になることは一般的にいえることである。筆者の見てきた範囲で言ってもより効用を高めるような援助のあり方があるだろうと思ったことは事実である。

Q ホンジュラスがこれから20年で日本のようになるためにはどうしたらよいか。

A 大変難しい質問であり、具体的に処方箋を書く能力はない。ただし日本の経験から言って重要であると思われる要素についてはお話しできる。まず第1に外貨が必要である。日本の場合は繊維産業が貴重な外貨を獲得したが、どのような産業でもよい。とにかく外貨を得ることができる産業を育成することが重要である。この意味ではもちろん観光産業でも構わない。第2に重要なのは貧富の格差の解消である。貧富の格差があまりに大きい社会では相対的に奢侈品の需要が大きくなる。国内産業育成の観点からも広く需要が生まれる方が望ましい。さらに貧富の格差が小さくなることは国内の治安を改善する。テグシガルパ市内でも大きな商店や企業はガードマンを雇い自衛しなければならない状態である。これは経済発展にとっては無駄なコストであり、マイナスである。第3に重要であると思われるのは愛国心である。ホンジュラスをよくしようという気持ちがなければ国内産業への投資はすすまない。みなさんのような若い学生がホンジュラスのことを考え、努力していくことが大事だと思う。日本の明治期の経験も愛国心の重要性を教えてくれる。

思いつくまま答えたが、ホンジュラスにとって何が必要かはみなさんの方がきっと詳しいと思う。

Q 西洋からの影響がなくても、日本は工業化したと思うか。

A しなかったと思う。講演中にも話したが、近世の間に農業生産力を高めたとはいえ、それは西洋で見られたような機械を用いた生産につながるような方法とは、全く反対のやり方だった。だから日本が工業化するためには西洋からのインパクトが絶対に必要であったと思う。

---

(21) 質問者には政治的な不正があるのではないかという含みがあったように思われる。